

住民から信頼される体制をどうつくるか

～SCと協議体構成員の人選、2層圏域の設定・事務局体制など～

提言

日常生活支援の体制は、
あくまで住民から信頼されるという
視点に立って構築しよう！

登壇者

【進行役】	氏名	所属
	長瀬 純治	(公財) さわか福祉財団
	松尾 好明氏	つくばみらい市第1層SC
	小山 貴行氏	志木市長寿応援課
	川嶋 祥子氏	志木市第1層SC
	渡邊 洋子氏	板橋区第1層SC
	小林 陽一氏	南アルプス市第2層SC
	大山 洋治氏	葛城市第1層SC
	園田 香奈子氏	亀美市高齢者福祉課
	田丸 友三郎氏	亀美市第1層SC

■ 寄せられた声から

- 協議体の構成メンバーの意欲のある人が多い地区は、住民への勉強会説明がよくできていて、住民参加の助け合いが実現していると感じられた。
- 各地区のそれぞれの取り組みが参考になった。

■ 議事要旨 長瀬 純治

この分科会のサブタイトルから、生活支援体制整備事業の運営に係るテクニカルな内容をイメージされる方も少なくなかったかと思います。しかし今回、登壇者の報告を聞いて印象に残ったのは、確かにヒントとなる手法も多く含まれていますが、どちらかというと現場における関係者の地道な活動と前向きな姿勢でした。

つくばみらい市は、当初本事業がほとんど進まない状況に頭を抱えていました。そこで、社協の働きかけにより行政と協議を深め、まずは関係者が足並みをそろえることに注力したところ、そこから加速度的に進んでいます。

志木市では、徹底的に住民目線が重視されています。この事業のスタートアップとして開催されたフォーラムの企画は、アイデアに富み手作り感が満載で温かみを感じます。また、住民の意見から市の壁を越えた地域コミュニティまで構築されましたが、その対応はこれまでの行政としての常識を覆す必要がありました。

板橋区は、大都市らしく区の大プロジェクトに本事業を組み込んでいます。ところが、その中で実施された第2層協議体編成の準備会は、圏域ごとに制度説明を行いますが、その後は対話形式で、参加した住民が納得いくまで何度も意見交換を繰り返すという驚くほどフレキシブルな対応が実践されていました。

南アルプス市では、この事業を他の事業と差別化し、関係者としての立ち位置を意識しながら、圏域の設定や協議体の編成に取り組んでいます。これまでの事業のように、住民にお願いして協力してもらうのではなく、お互いの検討時間を十分に確保し、グループワークなどを

積極的に取り入れ、自発的な参画を徹底しています。

葛城市は住民との適度な距離感と焦らないスピード感を大切にして取り組みが進められています。堅苦しい制度説明よりも、自分事として感じるような表現で住民の共感を得ながら、実践を積み重ねて協議体を編成しています。このような進め方は、時間がかかるため、関係者の基礎的な知識と、意識合わせには手は抜けれないと言います。

奄美市が、当初から勉強会形式で議論を重ね協議体を編成してきたのは、その機能として住民が本音を語れる場にする必要性を感じた関係者の意識によるものです。目指す地域像を決めても、それだけでは具体性がなく足踏みすることもあります。生活という視点で現実的な検討を継続的に進めるための試行錯誤を続けています。

さて、どの事例にも共通するのは、関係者が目線を住民と同じ高さに置きながら、同時にバックアップという役割を見事に果たしていることです。その背景には、担当者の努力はもちろん、組織内の理解、また組織どうしの共通認識という重要な現場環境があります。

一般的には、協議体の認知度はまだゼロに近い状況です。一方、本事業で整備すべきは、これまで一般的に構築されていた、効率よく必要な活動を実践させるためのトップダウンの体制ではなく、地域住民が自らの生活の中で希望する取り組みを、自発的に創出できる新たな体制です。だからこそ、この仕組みの中で、行政、社協、SCなどの関係者は、住民との距離感を意識し、各々の役割と立ち位置を確立していく必要があります。

アンケートの結果 参加者概数：98名 回答者数：80名

